

古都平安京と琵琶湖を眼下に、行者道を踏みしめ修行する回峰行者の姿があります。江戸時代の『淡海温故録』によると、比叡山には里坊も含めて「比叡山ハ三千坊、比良ノ山ハ七百坊」とよばれるほど多くの堂舎が建立されていました。堂舎はさまざまな歴史や信仰、思想に基づき建立され、現在、境内に約150の堂舎が点在し、「三塔六谷五別所」とよばれる複雑な山岳伽藍を構成しています。三塔とは東塔、西塔、横川を示し、それそれに根本中堂（一乗止觀院）、釈迦堂（転法輪堂）、横川中堂（首楞嚴院）が中心堂舎として建立されました。十六谷は東塔の五谷、西塔の五谷と横川の六谷で、五別所は現在の黒谷や安樂谷などです。これを「谷」とよび、山間の谷筋ごとに寺院群を構成していくます。さらに、京都の山裾や琵琶湖を取り囲む山岳の裾にも天台系寺院が点在しています。

比叡山には「論湿寒貪」という言葉があります。標高848mを最高峰とする比叡山系は1年を通して湿度が高い、夏は蒸し暑く冬は厳寒の

地となります。けつして過ごしやすいとはいえない山中で寒さと湿気に耐え、清貧を守り、僧たちは学僧として修行僧として、教学と論議を重ねています。

その山中での数多い修行に、相應和尚を始祖とする千日回峰行、伝教大師の祖廟のある淨土院での十二年籠山行、三年間、元三太師堂で真言を唱える修行があります。これらはその厳しさから回峰地獄、掃除地獄、看經地獄といわれ、「三大地獄」と表現されています。また、天台宗住職による修行に三年籠山行や百日回峰行もあります。修行僧は一端修行に入れれば途中で止めることは許されません。その荒行・苦行は自らを律し、仏を感じ仏と一緒に修業といわれています。

その比叡山は全山、鳥類保護地域に指定されています。それは次のことがらうかがえます。平成6年、滋賀県は記録的な渇水が続き、夏には琵琶湖の水位がマイナス123mまで下がりました。多くの湖底遺跡が顔を出し、坂本の湖岸では坂本城跡の石垣が現れ、石垣の実測と保存措置を講じた記憶があります。京阪神でも取水制限がなされました。

たが、比叡山の谷川は水量こそ減じたものの涸れることはありませんでした。山中には20力以上の湧水がありましま。主な水源名に、東塔の地蔵水、延命水、相應水、西塔の浄明水、独鉛水、雲井水、横川の如法水、碧玉水を始めています。

その多湿な比叡山で生命を育む水源は、動植物にとって命の源です。比叡山には多くわれている、弁慶水などがあります。これらは夏は冷たく冬は暖かく名水・靈泉とよばれている神水です。絶え間なく湧き出る水は山中での修行や仏への給仕に不可欠です。

さらに「エイザン」名を付けた草花も多くあります。比叡山から流れ出る谷川の流れに注いでいます。里坊の庭園で建立されていたので、谷筋の堂舎は冬でも凍結しない湧水のある深山幽谷の地を選びで建立されていました。里坊の庭園では山から流れる水をたくみに使い、比叡山の栄養分を含んだ水は山麓の仰木、千野、坂本、穴太、滋賀里などの水田を潤し、さらに、琵琶湖の固有種を育んできました。平安時代、慈円和尚は「世の中に山てふ山は多かれど山とはい、山といえば比叡山を示し、麓では「お山」と呼んでいます。山麓の人々はお山を深く信仰し修行僧、学僧を敬うとともに、自然の恵みを与えてくれる山と密接に結びついています。比叡山は今も生きている修行と学問、そして四季が織りなす自然の山なのです。

## 比叡山のさまざまな顔



比叡山麓の棚田

# 修行と学問、恵み多き自然

（葛野泰樹）

（滋賀県文化財保護協会  
がします。

静寂の中、小鳥のさえずり、谷川のせせらぎに耳を傾けば草花に目をやり、1200年の歴史に思いをはせ寺々を巡拝していると、高僧の修行に励んだ志が聞こえてくる気がします。

宝庫として昭和5年に国の天然記念物に指定されています。